ことばを学ぶメカニズム
認知科学からのアプローチ

今井むつみ
Imai Mutsumi

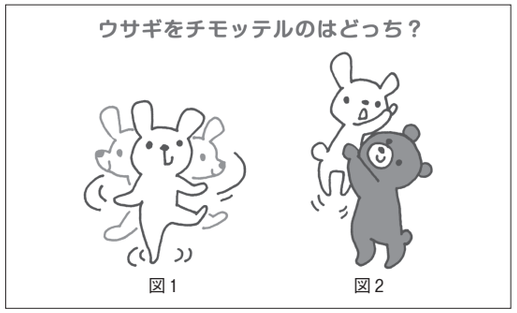
第10回
心的語彙に含まれる知識

自動詞と他動詞の使い分け

前回までの数回で名詞の可算・不可算を決めるための英語ネイティヴが無意識に持つ「感覚」について述べた。この「感覚」というのは，様々な用例の経験から無意識に抽出した知識である。そのような知識が存在するから，文脈に応じて，普通の使い方から外れた使い方（例えばもともとの不可算名詞を可算名詞として使う）ができるのである。今回は，動詞に対して，どのような知識を英語母語話者が持っているのかを考えてみたい。

動詞の意味は，動詞の文法的な形と深く関わっている。もっとも基本的な意味と文の構造の関係は，自動詞と他動詞と意味との対応付けである。自動詞（例えば「歩く」や「走る」）はたいていの場合，自分で何かする自発的な行為を表すし，他動詞は主体が客体に何かをしかけるという因果関係を含む行為を表す。この自動詞・他動詞の文法構造と意味の対応付けは，２歳児でもできることが発達心理学の研究からわかっている。

日本人の子どもは，助詞の「が」と「を」が，主体と客体を見分ける手がかりになることを知っている。ウサギがひとりで踊っているシーン図１と，クマがウサギを持ち上げているシーン図２を見せる。「ウサギさんがチモッテルのはどっち？」と聞くと図１を指差し，「ウサギさんをチモッテルのはどっち？」と聞くと図２を指差すことができるのである。ちなみに「チモッテル」というのは実際には存在しない，実験者が作った造語である。子どもは，知らないことばを日常的に聴くので，すなおに自分が見ているシーンから知らないことばの意味を推測する。そのときに，助詞を手がかりに動詞の構文を見極め，さらに文が他動詞か自動詞か，他動詞の場合には，登場人物のどちらが行為の主体で，どちらが客体かを見極めて，知らない動詞の意味を推測することができる（今井・針生，2014）。つまり子どもは，単語の意味をおぼえるときに，一つ一つの単語の意味だけではなく，文の構文と（自発的な動きか因果的な動きかのような抽象的なレベルでの）意味の対応付けのパターンもごく自然に身につけているのである。



イラスト：ryuku　（今井むつみ著『ことばの発達の謎を解く』ちくまプリマー新書，より）

動詞の日本語流と英語流

しかし，動詞それぞれの意味を的確に理解し，効果的に使うためには，これだけでは足りない。その言語に潜む言語特有の「パターン」の知識が必要なのである。日本語は主語や目的語となる名詞をしばしば省略するので，文の中の名詞の数（自動詞は１つ，他動詞は２つ）ではなく，助詞の「が」「を」が動作の主体と客体を標す手がかりになるということは日本語に固有な知識である。実際，筆者が行った実験では，日本人幼児は「ウサギさんをチモッテルのはどっち？」と聞いた時に，文の中の名詞の数は１つで，クマのことは言われていないのに図２を選ぶことができた。

一方，英語母語児は主語と目的語の名詞が文から省略されることはめったにないし，格変化を指標する助詞をもたないので名詞の数と位置（動詞の前か後か）を手がかりに使って，自動詞，他動詞を見分け，動詞の意味を推測する。人がふらつきながらドアのほうに歩いていき，部屋に入っていくシーンを見ているときに，知らない動詞を含む文を聞いたとしよう。このとき，日本語では文字通り，「人がふらつきながらドアへ歩いて行き，部屋に入った」と表現する。これを英語にするとき

⑴ A man walked to the door and entered the room.

と直訳したくなる。しかしこのような文を作るネイティヴ英語話者はまずいないだろう。

⑵ A man wobbled into the room.

のように言うのが普通だ。日本語と英語では何がどのように違うだろうか。

日本語では，「歩く／行く」と「入る」という２つの動詞が必要だ。「ふらつきながら」という句が「歩く」を修飾し，歩く様態の情報を付加する。それが英語では“wobble”という動詞１つで済まされている。この語はもともとは「ふらつきながら」という動きを表す動作動詞であり，以下⑶⑷のように使う。

⑶ The table wobbles where the leg is too short.

⑷ His knees began to wobble.

⑵ではもともとのガタつく，のような意味が“into”という前置詞とともに「ふらつきながら［部屋に］入る」という意味に変化している。方向を示す前置詞が後に続くと動詞の意味が「○○しながら**移動する**」という意味に変わるというのは wobble に限らず英語の語彙全体を通して非常によく見られるパターンである。

副詞は動詞を修飾するもので，無くても文はつくれる。「テーブルがガタガタする」「膝がガクガクする」という日本語を英語にするとき，つい私たちは「する」「鳴る」「震える」などの，様態情報を含まない動詞を和英辞典で探してしまい，

⑸ This table is unstable.

⑹ My knees began to tremble.

などのような一般的な述語の文をつくってしまう。これが悪いわけではないけれど，様態動詞を使って⑵⑶⑷のような文を作れたらぐっとネイティヴの英語に近づく。極めつけは⑺の *Oxford Sentence Dictionary* に挙げられていた用例だ。

⑺ The little animal then staggered, wobbled and limped around for a few seconds before turning for the last time to his rescuers and wandering ***off back to*** nature.

そもそも英語では wobble のように，ある特定の様態が動詞として表されることが非常に多い。wobble，stagger，limp という同じような様態動詞が繰り返され，不安定によろめく感じが強調されている。さらに，最後に wander という移動の様態を表す動詞に“off back to”という前置詞句を組み合わせ，「消えて行った」という意味を作っている。「消えて行った」という日本語にとらわれると gone とか disappear のような単語を思わず使いたくなるが，そうではなく，wander のような様態動詞と前置詞を重ねて使うことで，その意味をつくるのが英語流なのである。

動作や行為が含まれるイベントの中のどの要素を動詞の中に入れ込み，どの要素を副詞や前置詞句のような述部の動詞以外の部分で表現するかのパターンを「語彙化のパターン（lexicalization patterns）」という。英語は動作の様態の情報を主動詞で表し，移動の方向を示す前置詞と組み合わせることで，動詞の意味を「○○しながら XX の方向へ移動する」と拡張させる。これは英語ネイティヴの持つ，英語特有の「動詞のパターンの知識」の典型的な例である。

英単語の意味を日本語に置き換えて覚えても，自然な英語の文を作ることはできない。英語特有のパターンの知識を体得することが英語の達人への道筋には欠かせない。次回はパターンの知識を身に着けるための方法について紹介しよう。

（慶應義塾大学教授）

◆参考文献
今井むつみ『ことばの発達の謎を解く』ちくまプリマー新書　2013年
今井むつみ，針生悦子『言葉をおぼえるしくみ』ちくま学芸文庫　2014年